非農家から水稲での独立・自営就農を目指して

その他（研修）

合濱俊樹氏

概要

◆氏名・所在地
合濱　俊樹　　青森県青森市

◆研修開始年
令和７年２月

◆研修内容
水稲栽培での就農を希望し、青森市内の水稲農家の下で２年間の長期研修に取り組む。

1 就農相談までの背景

青森市で土木関係の仕事をしていたが、知り合いから青森市内の農家を紹介され、水稲の栽培を手伝ったことがきっかけで、農業に興味を持った。その後、後継者不足や耕作放棄地の増加など地域が抱える現状を目の当たりにし、自身で農業経営を行いたいと考えるようになった。

就農に当たって何から始めれば良いか分からなかったため、青森県農業経営・就農サポートセンター（以下「サポートセンター」という。）へ相談した。

2 相談内容

青森市で独立・自営就農し、本格的に水稲の栽培を行いたい。

しかし、非農家出身で、栽培経験がほとんどないため、研修を受けるなどして、水稲の栽培技術を習得したい。

また、就農後の資金面に不安があることから、支援制度等について具体的に知りたい。

3 支援内容

●相談対応

就農相談時点では、農地や機械の取得、生活資金面を含む営農計画が構想段階だったため、サポートセンターにて農業を始める上で必要な情報や研修制度の紹介のほか、国等の支援状況について説明を行った。

研修受入先で水稲の作業を行う様子

●関係機関との連携による取組

今後の支援方針について情報共有を図るため、サポートセンターのサテライト窓口である東青地域県民局地域農林水産部農業普及振興室（以下「普及振興室」という。）、市、あおもり就農サポートセンター（管内の市町村が農協に委託し就農支援をしている組織）を交えて、相談者と打合せを行った。

●研修受入先の決定

関係機関と打合せを重ね、栽培品目と就農地が定まったことから、普及振興室を通じて、研修受入先を検討した。

その結果、相談者が当初から水稲の手伝いをしに行っていた青森市内の農家を研修受入先として選定することになった。

その後、普及振興室及びサポートセンターで研修計画の作成支援を行い、令和７年２月から２年間、研修を行うこととなった。

今後の意気込み

サポートセンターへの就農相談を契機に、就農に向けた一歩を踏み出す事ができました。

今後も研修先や関係機関の方に相談しながら、青森市で農業を始められるよう、研修に一生懸命取り組み、知識や技術の習得に励みたいと思います。

専属スタッフ所感

当初は非農家出身ということもあり、漠然とした相談内容でしたが、打合せを重ねるごとに、就農ビジョンが明確になり、目指す方向性が固まっていきました。

研修受入先は、相談者に対し、技術指導だけでなく、地域の農地を紹介したり、機械や施設等を貸す意向を示すなど、就農後のサポートも期待されます。

今後も、研修受入先や関係機関である普及振興室、市、あおもり就農サポートセンターと連携しながら、研修状況の確認や就農に向けた支援を行っていきます。

サポートチームの支援により順調に規模拡大

自営就農

令和6年

自営就農

岩手県

新山氏

概要

◆氏名・所在地
新山　麗佳　　岩手県野田村
◆就農年
令和３年４月
◆経営規模
ブロッコリー３ha、きゅうり0.25ha、ねぎ0.3ha
◆従業員数
家族労働　１名、パート・アルバイト６名
◆事業内容
ブロッコリー・きゅうり等の野菜栽培に取り組む。

1 就農相談までの背景

新山氏は、子どもの頃の家庭菜園が楽しくて、将来はキャベツ農家になりたいと思っていた。結婚を機に東京から夫の地元である野田村に移住。夫の実家が水稲農家だったため、農業が身近になった。

転機になったのは、**夫がブロッコリーの栽培体験会に参加**したこと。**農作業の手伝いをしているうちに、野菜栽培の虜に。「これは私の仕事だ」と直感。**やってみようと思い、まずは**岩手県農業経営・就農支援センター（旧農農業経営相談所）のサテライト窓口である普及指導センターに就農相談**した。

2 相談内容

水稲＋野菜での就農を考えているが、**お勧めの品目及び借りられる農地について教えて欲しい**。

国の農業次世代人材投資資金（経営開始型）を活用したいので、**就農計画作成を支援してほしい**。

機械の導入に当たり、**利用可能な補助事業について教えて欲しい**。

3 支援内容

●栽培品目の決定

管内は雨よけほうれんそう・菌床しいたけの産地であるが、**ハウス導入経費が大きくなることから露地品目を検討**。

管内で生産が増加している**ブロッコリーにきゅうりを組み合わせる栽培体系とすることに決定**した。

●農地の確保

所在地である野田村及び隣接する久慈市の農業委員会が中心となり、農地の確保を支援した。

遊休農地を借りることで、飛び地ではあるが十分な農地を確保することができた。

規模拡大が進むブロッコリーほ場

●就農計画作成支援

品目の選定についてはＪＡ・普及指導センターが、農地の確保については市村・農業委員会が、機械の導入計画については、県農政部・普及指導センターが、**収支計画作成については普及指導センターが中心となり支援**を行った。

●規模拡大支援

規模拡大に向け、令和６年度は**農業経営・就農支援センターとサポートチームが一丸となり栽培技術の向上、省力化機械の導入、農地の確保を支援**。

就農した令和３年度の0.6haから、令和４年度は1.7ha、令和５年度は2.6ha、令和６年度は3.6haと**順調に規模を拡大**。さらに、令和７年度は、きゅうり、ブロッコリーの規模拡大を予定。

令和6年度に導入した省力化機械（乗用全自動野菜移植機）

今後の意気込み

今育てている野菜の品質を高め、自分が理想とする姿に近づけることが目標です。

そのうえで、さらに規模を拡大しながら違う野菜の栽培も検討しなければいけないと思っています。

規模拡大することで雇用を増やし、地域の活性化に繋げていきたいです。

専属スタッフ所感

経営の中心となる果菜類にブロッコリーを組み合わせた栽培体系の先駆者であり、野菜栽培での新規就農のモデルとなっています。

今後は、更なる規模拡大、栽培技術の向上、法人化等を農業経営・就農支援センターとサポートチームで支援していきます。

農業に魅力を感じ他産業から野菜農家へ

自営就農

令和６年

自営就農

宮城県

一番活躍しているトラクターと　堀氏

概要

◆氏名・所在地
堀　哲弥　宮城県丸森町
◆就農年
令和６年３月
◆経営規模
ブロッコリー　0.3ha、ニンジン　0.8ha等
◆従業員数
パート・アルバイト　５名
◆事業内容
研修先で学んだニンジンを中心に、露地野菜を年間出荷できる栽培に取り組む。

1　就農相談までの背景

岡山県出身。東京の大学に進学後一般企業に就職し、仙台市へ転勤。宮城県での生活に慣れ、管理職も任される中で、徐々に仕事に対する疑問や将来への不安を感じていた。このとき、**「生涯できる仕事」と「やりがい」を考え、一次産業としてニーズが高まっている「農業」に興味を持つようになった。**

農業経験が全くなかったため、ネットで情報収集し、**「宮城県農業経営・就農支援センター」が行っている就農相談会を知った。**

2　相談内容

ネット等を活用し、宮城県内で**「移住と研修が出来る」「有機栽培が出来る場所」**について情報を集めた。

その中で、雪が少なく、仙台市より南で、**「移住＋農業が実現できる場所」**として、宮城県の仙南地域を候補と決め、具体的に受け入れてもらえる就農地や、就農までの道筋について相談した。

3　支援内容

●生活面の相談対応と研修機関等の紹介

相談会後、就農候補地が丸森町になったため、**サテライト窓口である普及指導センター及び丸森町と情報を共有することにより、**堀氏が希望する空き家、農地などの様々な物件を紹介することができ、**スムーズな移住先の確保につながった。**

また、月１回、農地取得・生活資金面などについて、丸森町等の関係機関で打合せをおこない、就農に向けた支援体制を整備した。

研修先は丸森町及び普及指導センターで検討し、研修先を紹介。本格的に研修を始める前に、研修予定先で１年かけて農業体験を行い、その後１年間、本格的に研修を受けた。

研修先やJAの指導の下、初めてブロッコリーを収穫

●関係機関との連携による取組

研修先が決まり、本格的に１年の研修が始まると同時に、補助事業を活用できるよう、**丸森町や普及指導センターを中心に支援体制を強化し、就農計画の作成、農地、資金の借入等を重点的に支援した。**

●就農市町村の決定

農業経営・就農支援センターの就農相談会で、「丸森町は移住者が多く、農業を実践している先輩が多いこと」や、「移住＋農業を実現する上で、町独自の支援策やサポート体制が整っていたこと」等の情報提供をしたところ、丸森町を就農地の第１候補として就農活動を展開することにつながった。

現地確認で育苗の状況を関係機関に説明

今後の意気込み

丸森町で念願だった露地野菜の栽培ができました。現在は研修先や町内の先輩農業者の方の働き方や作型を必死に勉強し、農業に励んでいます。

令和６年は夏の暑さや急な雨など、天候に振り回される１年でした。今後は、天候に負けない苗作り、排水対策で、年間を通して安定した出荷ができるよう頑張ります。

専属スタッフ所感

研修中から、地域の方とコミュニケーションをとり、早い段階から地域に認知されたのは、堀氏の努力と経験の賜です。研修中の就農準備はとても大変だったと思いますが、しっかりと将来を見据え、計画を作成されました。

就農後は労働力不足が懸念されましたが、一時的に雇用を入れることで、収入が増えることを実感され、既に１年目の目標収入を超えました。効率よい仕事を目指す堀氏を引き続き、支援していきます。

サポートチームによる支援で円滑な就農を目指す

自営就農

蝦名氏（旧姓 鈴木）

概要

◆氏名・所在地
蝦名　絃稀（旧姓 鈴木）・秋田県北秋田市
◆就農年
令和７年４月
◆経営規模
露地きゅうり　10a（予定）
◆従業員数
家族労働　１名
◆事業内容
露地きゅうり等の栽培に取り組む。

1 就農相談までの背景

高校卒業後、他産業に従事していたものの、農業のアルバイトを行った際、自らの手で農産物を生産・出荷することに喜びを感じ、就農したいと思うようになった。生産者である祖父の後押しもあり、将来的には地域の中心的な担い手となることを目標に、まずは県で実施している２年間の研修を受講することになった。

研修を受けるなかで、就農後の資金面などに不安を感じ、地域振興局に設置されている「農業経営・就農支援センターサテライト窓口」に相談。

2 相談内容

就農後はきゅうりを主体とした野菜生産等に取り組みたいと考えており、研修を通じて栽培技術や経営に関する基礎的な知識の習得に励んできた。

しかし、就農後の資金確保などの経営面の不安があり、活用可能な融資制度や補助事業などについての情報を得たい。

また、栽培に適した農地の選定についてのアドバイスをお願いしたい。

3 支援内容

●関係機関と連携した相談対応

関係機関が一体となった支援チームを編成。

その上で、普及指導センターと北秋田市役所が連携して、融資制度や設備導入等に活用可能な補助事業を紹介した他、事業費が高額になることから、導入予定の設備をより安価なものに変更すること等を提案し、事業費を低減することができた。

また、上記の内容を反映した就農後５年間の営農計画の作成を支援し、就農後の具体的なイメージを描くことができた。

相談対応の様子

●農地利用に関する相談対応

普及指導センターにより、作付け予定圃場の物理性や化学性を調査し、野菜栽培に適した圃場にするために排水性の改善等の対策を提案した。

また、作付けにあたり、地番など農業委員会に確認すべき点があったことから、必要な手続きを普及指導センターが説明した。

作付けほ場の確認の様子

今後の意気込み

自分自身で調べただけでは分からないことも多くありましたが、関係機関の方々が連携して相談にのってくださったことで、就農に向けた準備を円滑に進めることができました。

就農にあたり不安な点は多々ありますが、地域の中心的な担い手となれるよう頑張っていきたいです。

専属スタッフ所感

高い志を持っており、生産者が減少するなかで、将来の有望な担い手候補です。

資金面などで不安を持っていたものの、手厚い支援により具体的な営農計画の作成につなげることができました。

就農後も栽培面や経営面で課題が出てくると思いますが、引き続き関係機関による支援をお願いしたいです。

150年続くさくらんぼを第三者継承で次の世代に

自営就農

菅原氏（左）と出し手の菅野氏（右）

概要

◆氏名・所在地
菅原佳士　山形県寒河江市
◆就農年
令和６年４月
◆経営規模
さくらんぼ 43a、もも　40a、すもも30a
◆従業員数
家族労働　1名、パート・アルバイト　10名（ピーク時）
◆事業内容
第三者継承により果樹園の経営に取り組む。

1 就農相談までの背景

宮城県出身の菅原氏は、県内各地でさくらんぼの木が切り倒されるのを見て、農家出身ではないが夫婦で就農し、さくらんぼの生産に取り組みたいと考えるようになった。

令和４年夏以降、夫婦そろって山形県農業経営・就農支援センターの就農相談窓口である（公財）やまがた農業支援センター（愛称：農サポやまがた）を訪問し、就農相談を行った。

2 相談対応

●農業研修に向けた流れ等を説明

菅原夫妻が農業未経験ということで、**技術習得の方法、農地取得の課題や手続き等**について助言。**また、研修中は研修に専念するため収入を得る活動はできないこと、小さいお子さんがいて、２人一緒の研修では、制約が出てきかねないこと、生活面をどうするかなどよく考えるよう**助言した結果、菅原氏１人での研修開始となった。

3 支援内容

●研修の開始、出し手との出会い

寒河江市でさくらんぼ園を営む受入農家の下で２年間の研修に取り組んでいたところ、受入農家の園地の隣に園地を有し、令和５年で農業をやめると宣言していた菅野恵子氏から、園地を引き継がないかと話があった。

●第三者継承に向けた関係機関の支援

菅原氏は、独立就農者育成研修１年目であったが、園地確保の好機と考え、受入農家、農サポやまがたと相談。その後、菅野氏、県西村山農業技術普及課も加えた４者面談を行い、継承に向けた話合いを進めた。

その結果、令和６年の春、園地と作業小屋、機械、技術・販路等、有形・無形の資産と出し手の「農」への「想い」も込めたバトンリレーが行われた。

●継承後の出し手からの指導・助言

独立就農後、菅原氏は、農サポやまがたの**「経営継承サポーター設置支援事業」を活用し、出し手の菅野氏に指導をしてもらう体制を整えた。**菅野氏から、６カ月間、一緒に作業をしながらさくらんぼ栽培や出荷、顧客管理等に係る指導助言を得た。その結果、JAさがえ西村山主催の品評会において「優秀賞二席」を獲得。

※「経営継承サポート設置支援事業」・・・第三者継承を行う出し手を受け手が働き手として雇用するための経費を支援する事業

●継承後の経営発展に向けて

自身の経営の発展と仲間づくりに向け、農サポやまがたが実施する「令和６年度やまがた新規就農者交流研修会」（就農３年以内の若手農家が対象）に参加。経営の専門家から指導を得るとともに、就農後の実態を踏まえた経営プランを考え、研修会の場で発表した。

菅原氏は、令和７年度も、経営継承サポーター設置事業（２年目）を活用し、引き続き、菅野氏の指導を得て、美味しい果実づくりに向けた栽培技術等の向上を目指すこととしており、関係機関が連携しながら伴走支援を行っていく。

新規就農者交流研修会

JAさがえ西村山品評会優秀賞二席

今後の意気込み

山間園地の寒暖差を活かし、高品質で、美味しい果物の栽培に特化していきたいと思っています。地域になくてはならない、ここでしか作ることができない果物を生産し、お客様に喜ばれる農業を展開することが目標です。

専属スタッフ所感

出し手の農業をやめる時期と新規就農したい受け手の就農のタイミングが重なり、経営継承に向けた話合いに入ることができました。関係機関の参加も得て、出し手と良好な関係を維持しながら協議を進めることができました。

継承後、菅原氏は、農サポやまがたやJAの研修会に積極的に参加するなど、地域での仲間づくりに取り組んでいます。これからも初心を忘れることなく、農業に取り組んでいただきたいと思います。

大学卒業からの独立自営就農

自営就農

左は鹿野氏、右は木下氏

概要

◆氏名・所在地
鹿野　剛志、木下　歩美　　福島県福島市
◆就農年
令和６年４月
◆経営規模
モモ　45a、ブドウ　30a
◆従業員数
２名（就農者のみ）
◆事業内容
モモ及びブドウの栽培に取り組む。

1 就農相談までの背景

平成31年に福島大学に新設された農学群食農学類の１期生として入学。大学入学時はまったく就農を考えていなかったが、２年生の時に参加したイベントで福島市の先輩果樹農家と出会い、農作業を手伝う中で興味を持った。
その後、市と「福島県農業経営・就農支援センター（以下「支援センター」という。）」及び関係機関の合同相談会等に参加し、本格的な就農に向けて相談を始めた。

2 相談内容

果樹栽培の盛んな福島市で就農することは決まっていた。はじめは大学卒業後すぐの就農を考えていたが、相談会の中でやはり技術を身につけることが必要とわかったため、まずは研修先を相談した。
また、研修時から就農に至るまで活用できる補助事業の情報や、青年等就農計画の作成について相談した。

3 支援内容

●研修機関等の紹介・研修中のフォローアップ

相談者に研修情報を提供し、福島県農業総合センター果樹研究所に決定した。
相談者は就農準備資金を活用して研修を開始。専属スタッフやサテライト窓口職員が、年に２回、相談者の研修先を訪問し、現状の確認と今後について研修先の指導者と共に面談する等のフォローアップを行った。

●農地の相談対応

成園地のマッチング支援や生活資金面など、農業を始める上で必要な情報の提案を関係機関が連携して行った。

果樹研究所時代の視察研修の様子

●青年等就農計画の作成支援

普及指導センターで計画作成の支援を行い、鹿野氏は初年度モモ45a（苗木を含む）、木下氏は初年度ブドウ30aで営農をスタートした。

●栽培指導会やセミナー等への誘導

福島・川俣地域新規就農者研修会やアグリビジネススクールに積極的に参加。

福島・川俣地域新規就農者研修会受講の様子

今後の意気込み

果樹栽培は収穫できるようになるまで年数がかかるため、はじめに成園地を引き継ぐことができたのは大きなことでした。
今後は、自分たちの作ったものがブランドとして消費者に少しずつ認知されるよう、日々勉強しておいしい果物を作っていきます。また、若い世代の新規就農のモデルとして地域農業発展の力になりたいです。

専属スタッフ所感

相談者は大学を卒業したばかりで、農業経営に関してはほとんど何も知らない状態でしたが、ご自身でも積極的に果樹農家等に赴いて情報収集され、こちらからの支援に対しても意欲的に取り組まれていました。
地域の担い手となっていただけるように、今後も経営相談を通じて引き続きフォローしていきます。